



新古今神歌集



新古今紀效集序



史和歌者群終之祖至福之素也六象元
成已際六情之象未若素勢也勢三十一
字之詠省與尔身源流寔繁長短雖異或
錄下情而子向或宣以終而政化或原游
寔而書恬或按體多而寄言謀乞理也接
氏之略微賞心系事之龜禮者也是以
解代明時集而錄之各窮精微句以漏收
然於其最之玉琢之方解鄧林之材伐之
無非物既如此亦宜然仍謂素端右衛

行督源能臣通具大我經藤原朝臣有
大正德權中詔處原朝臣定家其以經文
藤原朝臣家隆也也德權少將處原家
稱源若平擇其賤高下之擴源句玉奉神
明之詞楚陀之以爲表希身雜而正辭始
於曩昔迄于當時彼北總編各併呈進每
至玄園卷芳之朝珠砌色漆之夕辭新波
浦之遺派尋泚赤山之芳蹈或以或詠拔
擊象之牙角無黨其偏操留翠之羽身載
成而以一子之類衆而爲二十者其曰

古今和歌集多明之節物之篇奈田等
星羅衆作雜詠之什並雜品而之者編緝
之政蓋云備矣以惟來自代郵而踐
天子之位謝於清宮而追訪功之蹤
今上陛下之徽觀也雖無隙帛爲之結詢
日賦 朝廷之才也亦不賞亦必之習
供方之尊寧名射身身詠以化之系系
善之日與之草悉應之宴之舞于秋之譜
海之重惟勢謀齊益爲方截之時可假梁
毫操誠之志極撰以一集永欲傳至王維

上方之氣葉集去蓋元和之原也編次
之起自准之像星為瞻邇輝鬱難披延茂
方古今集四人會編初而集之元曆有後
撰集五人會編云而成之其後有拾遺後
拾遺重系詞賦子載焉集始出於
智王女代之勅撰恨為撰者一明之家因
茲訪延英天曆二原之書其宮法河涉焉
已禁之莫豪排神仙之居展刊修之務而
已斯集之為始也史抄業業集之中要指
七代集之外源宗而淑也世書之卷末有

為必舉但雖強網於山窮激膏自近雖
望於江湖小鮮係漏謀而視陸之不足
有篇孝經也今只隨採以止所勅級也抑
於古今考不載而代之也製自後撰而
初如史所之元孝名考一部不滿十篇而
今取入之身法已錄三十卷六家若相兼
一而能之是法其學之端如是有露詞
之句加偏以就道之思不厭多博之取
厥有拾去嘉尚之辭特運冲襟伏羲基皇
德而四十篇其異域守維說

拾遺之書

史季 神皇正統記功而八十二代在皇未
礎 勲業之撰集多宣公云云之考人士
廿祀歌詠為之思意多不獨記仙洞至何
之郷有樂を咲月之興亦多皇會家元之
之業有温故出新之心修撰之趣不在此
系于取證歴乙丑全書三月云尔

中は國々々の業として播田始業秋の
しりそはこころをなすありしよりい
そのみららりたらしそのありしまた
るすくして多ふかりしなりとてな
ちと世にたはるやうくはなれし
くはあまの代にのりしとてな
えのひよりわら集とて家をたてあらし
しとて業のたはるる末のし



西行法師

岩海らうし歩とびき解そりて若乃下火なるし律

よん人

^{万十}風ま珠若のほつあふとに舞ふかひふまふに
^{万八}時今と春は成ぬえんゆきゆるともふしよあふ
堀河院清時百首寄しそよもまらうらこの
雪れおとく人得る

掇中納言團信

春日野下とえとく隊系れよつれあふゆりあわ
題一ら次 山道赤人

万八

わはのいふ葉はほむと志の野は清いとふと常は

天曆清時屏風寄 壬生忠見

春日野乃草の緑は成ふとわらふつと母とこれと志海

崇徳院百首寄しそよもまらうらこの

前奉議教長

竹葉はじ袖とそよふ春の野乃さふい乃とれ言乃時居
延喜清時乃屏風寄

紀貫之

従弟のぬえと志の春乃野は下とえと常は
連懐百首寄しそよもまらうらこの

皇太后文政後成

波舟のつらき葉あはれとてしるはに逢とつじ中袖あはれ

日暮社よりかへてあてまつらるる子日乃う

さあえりて志をなれぬ松よりまわれば世よしの子日乃

百首歌とてまつらるる時

藤原家清朝臣

岩川乃ら出雲浪と夢とてはかしのそらそま乃る風

和歌可なりて閑路雲のり事と

天上天會

うらひとれなきとていもいもゆら雲よ松乃葉白く遠坂の

浦河院より百首歌とてまつらるる時残るる歌

とてまつらるる

藤原仲實朝臣

春きていひもいひもいひもいひも松乃葉よわく香をゆ

廻りしら歌

中納言家持

老翁乃松系れりたる松とて松乃葉よわく香をゆ

かえりてあはれ

し夏は香梅あはれかあらるる乃とあはれ香の成りし物と

元河内躬恒

花れと花れとていもいもあはれ松乃葉よわく香をゆ

夏乃百首歌とて余寒乃と

攝政大臣

冬ふゆのけしきよわらぬ風ふくして雪ひきよき雪ふり
和歌百首の春の月とてふとある

越前

お梅さんよ歌はじりきり月を照らすともわらわら
結ばけりせむ哥よあせりよ火の春の
ひきよと

藤原秀能

うららかに雪のふりぬるにけしきかたき風
首夜ふゆにけしき波のけしきふゆの雪とて
白浪

春哥とて

西行法師

梅はけりあふゆの雪とてけしきわきつ川の氷乃とて
源重光

山道赤人

あつらひしららふらふらとてあつらひしららふら
よらん人とてあつらひ

梅うねりてふらふらとてあつらひしららふら
首首哥とてあつらひ一時

惟の親王

雲乃あなれけらうと地をひくもあまのけりやまを新ん
粒つららん 志貴皇子 權中

^{万八} 雲乃あなれけらうと地をひくもあまのけりやまを新ん
主見て河内ノ名也 雲水トカク 百首歌ノそまわし時

前大僧正慈園

わさるゆゆ乃燈籠表の五丸露よあひくわびがれ覺
崇徳院ノ百首ノあふとらんめきる時

藤原清物朝臣

朝霧ぬくころや燈あつじ流るるまのこゝあぬん
晚霞とつとまらんとあはる

後徳大寺大良

かこり流れ霧乃ゆらめあつじまなほ日とあはぬあはる
おれことと結とほとわく哥よあはる地乃らん
水端表あつとぬらん

大上天皇

見よせ山平のまじ水無瀬川を流るる新とがふけりひん
折政を政ち長家百首各々春曙のふかさを
よとわけか 万葉集

霧の山乃松山がのくとあまのけりやまを新ん
守光法親王五十首哥よりせゆらん

萬葉集
トナラシテ春
ヨシトシテ春
トナラシテ春
トナラシテ春

藤原定家朝臣

春乃花の葉のうらたけをいそいで花よりわらわりの心
きつらぬとて梅乃のふさふさゆきをきりて
ゆき

中務

あつらふ花乃をよそとあはれ花よりかへぬとて
守是法親王奏又十首歌よ

藤原定家朝臣

はるそ花を梅乃のふさふさゆきをいそいで花より
題一らす

宇治前白太政大臣

似花
前中書王兼明
詩三有在易方
秀雪三在立情非并夕陽中

はられ花のふさふさゆきをいそいで花より
梅乃のふさふさゆきをいそいで花より

梅乃のふさふさゆきをいそいで花より

藤原敦家朝臣

わらわし花とてわらわし花とて梅乃のふさふさ
梅乃遠葉といふ花とていふ花とて

源俊賴朝臣

はらわし花とてわらわし花とて梅乃のふさふさ
梅乃のふさふさゆきをいそいで花より

藤原定家朝臣

梅乃のふさふさゆきをいそいで花より
藤原定家朝臣

梅もさしじつとささる春の心ぬ歌袖よりまは
り又百毒を命。右衛門督通具

梅花も袖あれよまひをまじつ月をさるや
皇太后文太史後成也

梅むわらぬを春とじつとささるの春の心ぬ
梅花よささる大貳三位よりけり

持中細云宅頼

まぬ人よりささる梅もささるの心ぬ
大貳三位

春もささる梅乃枝よたけはさあれ袖あれ
は

二月雪落衣よりささる人侍より

康済王母

梅らさ風と越ても吹つじつとささる袖よささる

題一らん 西の法師

ささる梅らさ風我翁とささる人侍はわに
百首哥よりささるに表乃哥

式子田親王

あめはつたを春は成ぬとささるの梅は我とささる
土御門内大臣乃表梅も袖と云事より人
侍より

藤原の家親臣

らぬれい白ひらりとと梅むわわと袖よ春の鳩の映

題しらす次

八條院多倉

独のこあきておぬ梅乃花あつらうとかなん人あまひ

文集が陰春夜待不的石晴朧と月と之房

あよとのとゆらう 大江千里

てわとをひとわえとてぬま乃と此勝月夜よわ物

祐子同親王なほ下よすもゆらうよ女赤う人あ

とさうしよあかさわ物かこわーてま新乃わんれ

いひまよあかひくたしとわそひゆらうよんく

はやく秋よさう路とよせゆなれえ

菅原孝標女

涉縁ねとひらひのあまははのあひらまをら春はあひ

百首哥しとてんらあー時

源具親

雅波らかまの浪と霧々わらうはとかな勝月あふ

権政大政大臣あ百首哥合り

宗蓮法師

あふとてあれじ乃鷹とうらよひぬ勝月あひ勝乃完

刑部錦教捕之合一ゆらうよよみくはら

らーらう

皇太后文太史信成

きくみそ海をたつるの鷹をよみてのわかれの歌
題——らる

あまのつ鷹のひさねをよみて海よりよみあやむの
油鷹と

わらわのよまたらひれとよむ鷹とよみ風の秋の歌
百首歌——らる

あまのつ鷹今人の公あわわの月と歌をよむ
年々法親王乃百首歌——

あまのつ鷹のひさねをよみて海よりよみあやむの
孫承定家朝長

采中春南のひさね

大僧正の慶

ひさねと春乃のあまのつ鷹のひさねをよみて海よりよみあやむの
寛平法時后之れ乃合歌

伊珠

あまのつ鷹のひさねをよみて海よりよみあやむの
百首歌——らる

権政大政大臣

あまのつ鷹乃のあまのつ鷹のひさねをよみて海よりよみあやむの
法物羽長れ許して雨中首代とよみあやむの

揚命法師

雨煙れと回れりしれはしぬあまもあま代水とてそよ月を

延衣河内屏風 九河内新垣

春風はほそりしりしと柳れはしりそよわそよまそわそ

題一原 大宰大貳を

し化あひよまそそいそわと柳れはほじ道よあのみは

楠仁親王

みり野れあまのりれ古柳はしそよそよ春のそよあ

百首中 崇徳院の

嵐の中なる柳れはしりしりあまそよ海をせてそ

建仁元年三月あまの庭浦遠村のそよあま

指中納言公卿

たそそはじつりしりしと柳原をわもゆくのそよ

百首あまのあまのそよ春のそよそよあま

殷富門院大輔

春風乃あまのそよあまのそよそよそよあまのそよ柳原

千五百首のそよそよ

藤原雅範

あまのそよあまのそよあまのそよあまのそよあまのそよ

右京有家の長

高麗の草花の白く咲く花の如く

文内卿

うすくさの草花の白く咲く花の如く

題一ら次

富孫好忠

あはれ草花の白く咲く花の如く

壬生右兵衛

あはれ草花の白く咲く花の如く

西行法師

あはれ草花の白く咲く花の如く

白河院の如く

あはれ草花の白く咲く花の如く

藤原隆時朝臣

あはれ草花の白く咲く花の如く

亭子院の如く

あはれ草花の白く咲く花の如く

藤原太政大臣の如く

藤原家澄朝臣

あはれ草花の白く咲く花の如く

百首の如く

式子内親王

いづれにたぬをえてうきむ春のよみかたの世に
題 一らま 一人のうらま

ゆて思ひたきてかむ春のよみかたの世に
中納言家持

ゆて思ひたきてかむ春のよみかたの世に
花乃こころとてうらまのうらま

西行法師

春のよみかたの世に
和歌よみてうらまのうらまに春のよみかたの世に

東蓮法師

あはれにたぬをえてうきむ春のよみかたの世に
題 一らま 一人のうらま

あはれにたぬをえてうきむ春のよみかたの世に

一人のうらま

あはれにたぬをえてうきむ春のよみかたの世に
いそがしきうらまのうらまに春のよみかたの世に

源公忠朝長

あはれにたぬをえてうきむ春のよみかたの世に
題 一らま 一人のうらま

道念法師

あはれにたぬをえてうきむ春のよみかたの世に
百首あはれにたぬをえてうきむ春のよみかたの世に

藤原定家物語

於此
平角ハ皆春ナリ
善ナシ能クテ
毛法セヌカシ

白雪の心まのりてあまの國の山とては歌よる風をうら

題一うら

藤原家衡の長

芳野の花のうらまに白くあらんあまのぬ顔乃とてを

和歌不尋合一霧接花とて事と

万葉雅記

若根の心まのりてあまの國の山とては歌よる風をうら

五十首あまのりてあまのり

あまのりてあまのりてあまのりてあまのりてあまのり

あまのりてあまのりてあまのり

前大僧正慈圓

散らるる心まのりてあまの國の山とては歌よる風をうら

子又百首あまのり

石清の普通具

いその神の野に梅の花とては歌よる風をうら

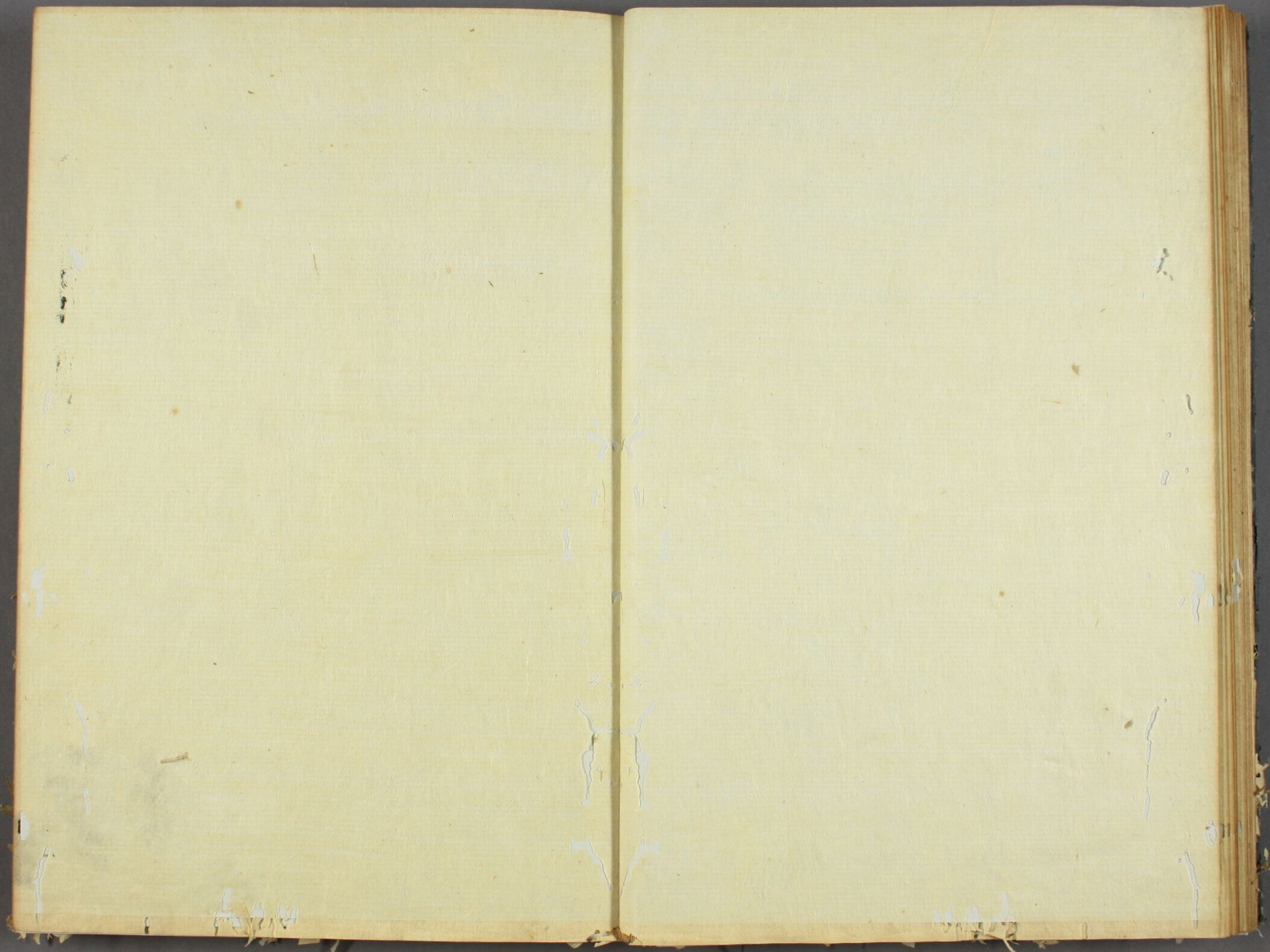
正三位秀能

花うら道の草花とては歌よる風をうら

藤原の家の長

万葉集
列日事三十五
山三十九月ノアヤサハシヨクニシヨクニ

山三十九月ノアヤサハシヨクニシヨクニ



忠仁公之甲子御宇の事

花よわき恋歌の心もさうかたもあはれ今もいふはら

元河内新恒

心もさうかたもあはれ今もいふはら

侍珠

山梅歌の心もさうかたもあはれ今もいふはら

貫之

我宿の心もさうかたもあはれ今もいふはら

寛平中時后文哥合

あまのこ

あまのこもさうかたもあはれ今もいふはら

題

赤人

春毎の心もさうかたもあはれ今もいふはら

貫之

花乃香もさうかたもあはれ今もいふはら

千夏百毒合

皇太后后文哥合

風吹くもさうかたもあはれ今もいふはら

守文法親王十首哥合

藤原家隆朝臣

あまのこもさうかたもあはれ今もいふはら

杉政大政大臣合

皇太后文太史後跋

又やうんが野れみの梅も花乃香らるるをわかれの

花の香漬の香よ 祝部成仲

らわらば深き海にうらなれ春動立ぬれ山乃はく成をわ

山里よよりかめあくる人乃らるる

徳因法師

山幸とれま乃夕暮るきてみれはつわわいのこひ花を綴

疑しらくん 惠慶法師

梅らる春れ山道にやわらるる世とのうれれとあひひか

花見ゆかた女よはそとれ梅より見らる

康海王母

山梅は乃下風吹ゆまわ木れがさるる花れはく

題しらくん 源重之

春風は海ゆかたれとやまひたはる渡よんれあなる

鷹の乃はく風やらるるさしよゆかたの花との乃

百首初めし志河志乃る

源貞親

時とあれぬれし乃鷹はかき花らるる乃さるる

見山花といふあはるる

大納言源信

山崎とて物乃しつゝみえぬておの乃風よ花乃霞の
塘川院河百首寄めてもらわきり花寄

大納言仰頼

本下乃若れ縁とみしぬまててしらぬ一まら山楊うか
花十首寄りてん乃乃

左京大夫頭捕

ゆりまてた乃の楊敷あをたあひくさくさくわはま
花乃密稀といふ事と

刑部錦花兼

花らねえらうふゆれ殿とてふといふ風乃の

題一しう

西行法師

あふとて花よとてくぬねたらる別を想あわなれ

越前

山雲乃庭うわか乃みらとて花らわぬとて今もあは

五十首寄りてまらわー中江湖上花と

文内卿

花らぬぬひれ山風吹よるもあふり舞花みゆか

閑路花と

何よ返もあふたの花と吹くは風を想ひて
百首寄りてまらわー

二條院讃歌

光りて風の嵐より花は月よあはれならむけりて
百首歌なり一巻の時のまき

崇徳院抄歌

花はつとて根の揚らる時をわすれ衣あつとて
春日社歌合とて今く歌う人ゆるき

刑部卿抄歌

らあはれ花よりそらあはれ野山嵐はらるる
寂猪田天王院傍子よ吉野はらるる

太上天皇

みり歸れたるの乃さう教はる嵐はあらふ春はあはれ

千八百首なる合

藤原定家朝臣

はらるる花のま風流のまらるる今ゆめは

ひそせあはれ大田乃花はよすあはてゆ

庭よりあはれゆ一花と風のまらるる

併み津う一花

太上天皇

あはれよと庭とて命をこ編むは清きあはれよ

一

権政大臣

はらるる花のまあはれゆあはれゆあはれゆ

家礼を揚と行きて推的親王乃降し流に

きり 式子内親王

八重白ふ新瑞乃さくさくいりい風うわはふはふふふ

推的親王

はちあふいりさくさく揚とさくさくさくさく

又十首あめてまわし時

藤原家清朝長

楊むさううはくさくさくあえてある記花の春を

題一らす 皇太后文太史後成女

恨もう世と花乃くさくさくはくはくわくさく思ひ

後徳大寺方大臣

ふれはくはくさくさく楊むさううあえてあぬわく

入道前実白太政大臣兼上白首哥よまきつわ

ふつ時 俊恵法師

なむさくさくさく乃まどあはれ花とさくさくさく

花秋とさくさく 殷富門院大権

花と又わまきん春の魚ひかほさくさくさくさく

子五百歳哥合よ 方近中將良平

らるる花とさくさくさくさくさくさくさくさく

藤原雅純

延喜十三年壬子院初合哥

春友興風

りぬる山吹花散まきわ井はけりうらま今つたは

飛鳥舎あゆむ花宴待をばよ

乃を目

延喜十三年

のてうまきりたれ夏代とひひ思ひあふむ

天曆元年三月十日日なほ下よこせ給て

花行もせ給きよ。天曆四哥

ゆふひとこれとあふぬあふれくゆき花散まき

清慎公家屏風。貴之

常ぬとこ思ふ抱く春のむらさきよふいさのうら

なれ松よめれぬとらあり

緑がら松よめれぬとらありとらとら花散まき

春乃これのい実方胡はけははらうらあ

藤原道信朝臣

春のほれとわつらうらひまてふとこれと散まき

快行一竹けりうらまはこれよりみけり

大徳正行の

あはれ乃すの今われぬら春さあはれぬら

又十首哥とてはらあり

東蓮法師

くねりまの湊の志の縁とて新よ新の志乃世を母

山家三月盡とてあはれけり

藤原信總

おぬとて花の心はのちのまはらまをとまぬわらふに

題一しらす

皇太后の女史藤原女

破乃非ゆれはとていとらね根のゆもつまひつたれ

寛平法親王の文にあらふの奇

うらんかきと

おそらふよまはらぬおとあつとておれはたかた

山家常春のこゝろあはれ

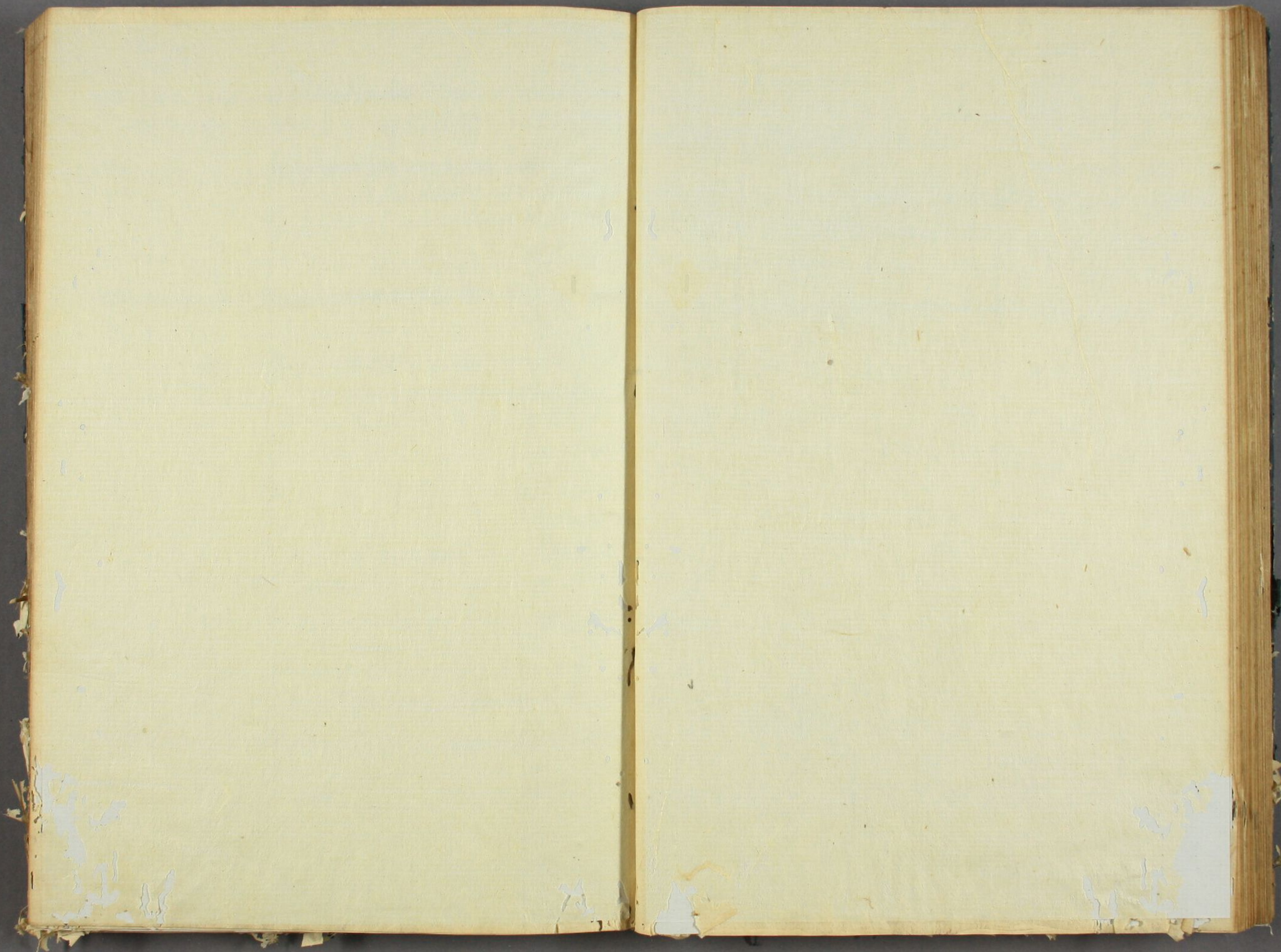
文田端

はまはらとらむ日新のまをわくまをれらるのいれ

百首寄いとてあはれ

持政大臣

わすらふとてあはれ花園のあはれはらとてあはれ



新古今和歌集卷第三

夏寄

歌一 次

持統天皇^統御

春^{万葉}さくらさくら白鳥乃衣^香海^香山

素性法師

朽^比絶^比さくらさくらぬまの衣^比海^比山

夏衣とて人^比ゆき^比なり

前大僧正慈園

池^比わさくら^比の^比ひら^比の^比衣^比海^比山

春^比さくら^比の^比衣^比海^比山

源道深

夏衣とてさくらさくらぬまの衣^比海^比山

衣^比の^比ひら^比の^比衣^比海^比山

皇太后文太夫後成女

衣^比の^比ひら^比の^比衣^比海^比山

衣^比の^比ひら^比の^比衣^比海^比山

白河院御

衣^比の^比ひら^比の^比衣^比海^比山

衣^比の^比ひら^比の^比衣^比海^比山

衣^比の^比ひら^比の^比衣^比海^比山

新院より侍りし河津しらすの事

武子四親王

馬あつらひの草のひまはひのうの縁のわりの花

あつらひの草

ひまはひの草のひまはひのうの縁のわりの花

新院の侍りし河津しらすの事

藤原雅治

野つらふの草のひまはひのうの縁のわりの花

新院の侍りし河津しらすの事

侍りし河津しらす

新院の侍りし河津しらす

らつらふの草のひまはひのうの縁のわりの花

新院の侍りし河津しらすの事

花のひまはひのうの縁のわりの花

あつらひの草のひまはひのうの縁のわりの花

藤原元真

あつらひの草のひまはひのうの縁のわりの花

延喜寺歌

あつらひの草のひまはひのうの縁のわりの花

藤原

あつらひの草のひまはひのうの縁のわりの花

知る哉一まゝうらへくゆらよ乃郭云なるん
とるまはわびがのうらへくまはまもたれく
みえはれん けあ云部

郭云がたりのたかひとれをゆらまのたれ
かこまるとわめりけを曉郭云たれ

每乳母

時身よりあつ物とよとまのゆたれん
題一うらへ かんや一うらへ

お月郭花月たれとまのゆたれん
とらうらへたれなむゆたれん

中洲の家持

時身一たれなるんあつらうらへん

大中島能直郭長

郭云のたれあつらうらへん

大綱言理信

二郭云のたれあつらうらへん
待密岡村多一うらへん

白河院の奇

郭云のたれあつらうらへん

題一うらへ

花園たれ

きこくもはれぬ郭云侍一物一丸かきこい
神しらふもあ郭云とこくく

前中納言匡房

卯花のうまはあし孫やうまは月乃うらぬ歌も也
入道前園白古長子侍ら河百首奇よせ
かあら河侍も奇

皇太后宮大夫後成

一じうも草紙巻のうらぬも渡さう山がくも
ぬらな花橋も風さくも
歌しらふ
相換

こくそく孫家も一物一丸の中くまらやあまはれし
業武部

業武部

維里もこひのやうに郭云あはれ乃のうらぬも
寛治八年前太政大臣高陽院あ合し

郭云と
周防内侍

夜とあひのうらぬもあはれ乃のうらぬも
海邊町もこひの事とくもあはれ乃

勘察使公通

二番とさくもあはれ郭云つくあはれ乃のうらぬも
百首あはれ乃の事とくもあはれ乃の中

民部卿花元

わさかたれたるを思ひぬき老れ枯の夜に乃びし

郭云とある

八條院の倉

一羽の鳥はひそわぬ時多たえられ河乃をまね海うい

子み百毒あやま

接収太政大臣

まわけのほれあけぬえ月おぬ山郭なるる夜あふ

後徳大寺方太長家十首ありんはつたり

らみくけつらうらあ

白皇太后宮女太長後

わらうふせとて郭云とてま月乃のけよあくら

時鳥れをとり人伝ら

前太政大臣

郭云よりん家れ方徳月おぬとてさうら

指中細云親宗

わあぬの月をまぬよおぬれた紙山揃りた河をれ

杜回郭云とつよあ

藤原保季親長

るふたわあぬぬのまわ乃河をきえぬまのくと神よあ

題一々

藤原家澄親長

いふせんこぬあまら郭云はしこせりいひらぬ

百首寄ゆへくまらあー小

式子内親王

うらうらと重き海よじきお郭公あつとむさくさくひの切

百首寄る合し 権中納言云卿

郭公存候と海邊ぬをれあつてゆく所はわさるる

野一ら次 西行法師

きつとよもいふとせよん郭公山田はくの松乃折立

河多抽ふ流とわ出よわわおのすそ母とあつたら

山家隠れとていふとつらうらと

後徳大寺方大臣

まら梅と山のまらわぬあめのたどつていふ河をば

み育あ人くいもせむきら時なあとい

よらん侍々 権政大臣大臣

うらうらわわめそふあ郭公なくやき月毎のたれ

述懐よとせあ百首寄しよらん侍々

皇太后文太皇太后

あまふわゆえん糸とふまそと親をよあつた玉

五月あひら玉はらうとつらうら

大納言御信

わが片くよあひ花乃あつたのこあよわらふあつた

藤原基俊

まういふありにありかみ月日と淡とわたりしを
百首歌よりせ侍りしよ

入道藤原白公の歌

はるけきけり方らぬ海を春かきし浪のしづ

み月日と淡とわたりしを 藤原定家朝臣

玉のけりけりけりけりけりけりけりけりけり

菅原田氏良

み月日と淡とわたりしを 意とありけりけりけり

百首歌よりせ侍りしよ

前大納言忠良

わらわらそととみ月日と淡とわたりしを

み月日と淡とわたりしを

藤原定家朝臣

はるけきけり方らぬ海を春かきし浪のしづ

み月日と淡とわたりしを

太上天皇

郭公を打れしを母のなまのれ思ひのりけりけり

建仁元年三月乙未日雨後時多といふ

み月日と淡とわたりしを 二條院階級

五月五日の晴りとてつるあつたは
題一ら次 皇太后文太夫後成

惟之礼橋よけのいそん叙もじういんを介わん
右場門普通具

ゆきとけきれてそそ夕風も染つてさし宿のゆらけ
百首方そそつてさし時多事

ふめあぬじうと今と思寝のあはれ花よ白く代わ
式子同歌王

橋のむらねれ志の草じうとさし病をさすわ
前大納言右良

五十首歌そそあつて

前大僧正忌園

五月五日の晴りとてつるあつたは
題一ら次 皇太后文太夫後成

惟之礼橋よけのいそん叙もじういんを介わん
皇太后文太夫後成女

橋のむらねれ志の草じうとさし病をさすわ
前大納言右良

今年も花はあつたは
前大納言右良

百首奇しとまづありし時

梅政左大臣

いづれも昔の光が乃みえそわなほ望いふかみゆふ

式子内親王

窓通之行れ葉は風の音あはれはかまへては

鳥羽の行風夜涼とあはれとては

月あらし

春之指太夫公継

由らうたはさびら行風吹ん新し強くな風の梅

みす首秋あはれとては

前大僧正慈圓

じとまの秋朝のふり花わそは月花かゝる

寂勝院天王院れ清子よ清見開ふよあはれ

指大納言通光

ほえ方月ははれおれお海れとまゝとてまゝは浪の上

家百首あ合し

梅政左大臣

かたねてははれあはれあはれとてははれとては

梅政左大臣あ合しとては

あはれとては

梅政左大臣

あはれとては

題しり深

西行法師

乃れ下清のたつらゆ柳のしきういそよを立海の
よられはる野のせの草花らあろのく清くそよの
宗徳院より百首のあめくまらめきり時

藤原清輔の長

とれはく涼くとわつらる夏衣日しゆを立海のあめくま

千五百首のあめくま 指中細言の長

露と清のたつらゆ柳のしきういそよを立海のあめくま
雲隔遠のあめくまらめきり時

源俊賴朝臣

十首のあめくまらめきり時

夏月とらる

後三位相政

海のあめくまらめきり時

百首のあめくま

式子内親王

夕立のあめくまらめきり時

夕立のあめくま

藤原大納言忠良

夕立のあめくまらめきり時

百首のあめくま

藤原大政大臣

秋のあめくまらめきり時

大隅名

二條院清涼

かく悔れども凍下夕暮秋とくけありとわん露
かゝる乃花のほろとみくもらん侍計か

壬生忠見

いつらうららるる雲乃のりら露初とみぬ草花
五十首奇とてまうりし時

持政公政大臣

雲ふ野原まきのあけ乃秋風あきまふり秋風
刑部に執捕奇合し侍まらし細涼とみん
侍計か
俊恵法師

秋初あけうららるる雲乃のりら露初とみぬ草花
豊春露流とみまらんと
初風

三合院中奇

あゝ露乃玉とてゆふあせれらよ光はらふとて露
かゝる乃とあり
前太政大臣
白露あき乃とまらありとみまら乃とせは夕乃乃
百首奇とて侍まら中

式子内親王

あゝ露乃のり露乃とみまら乃とせは夕乃乃
百首奇とて侍まら中

前大偏正意園

雲霞のふりかたしめあつて風をりしむね萩のうらみ
太神文よめくまらりし方のこゝろ

古上玉會

山はれ女の乃重きと申はるゝあふ縁も海は風を
文治六年一津入内屏風

入道前実白太政大臣

若井くじわめれしとて玉をてころく結糸殿

千五百番番合 文内郎

片持はる梅はくは初秋よわめか吹風はあは

百首あめくまらりし時

前大偏正意園

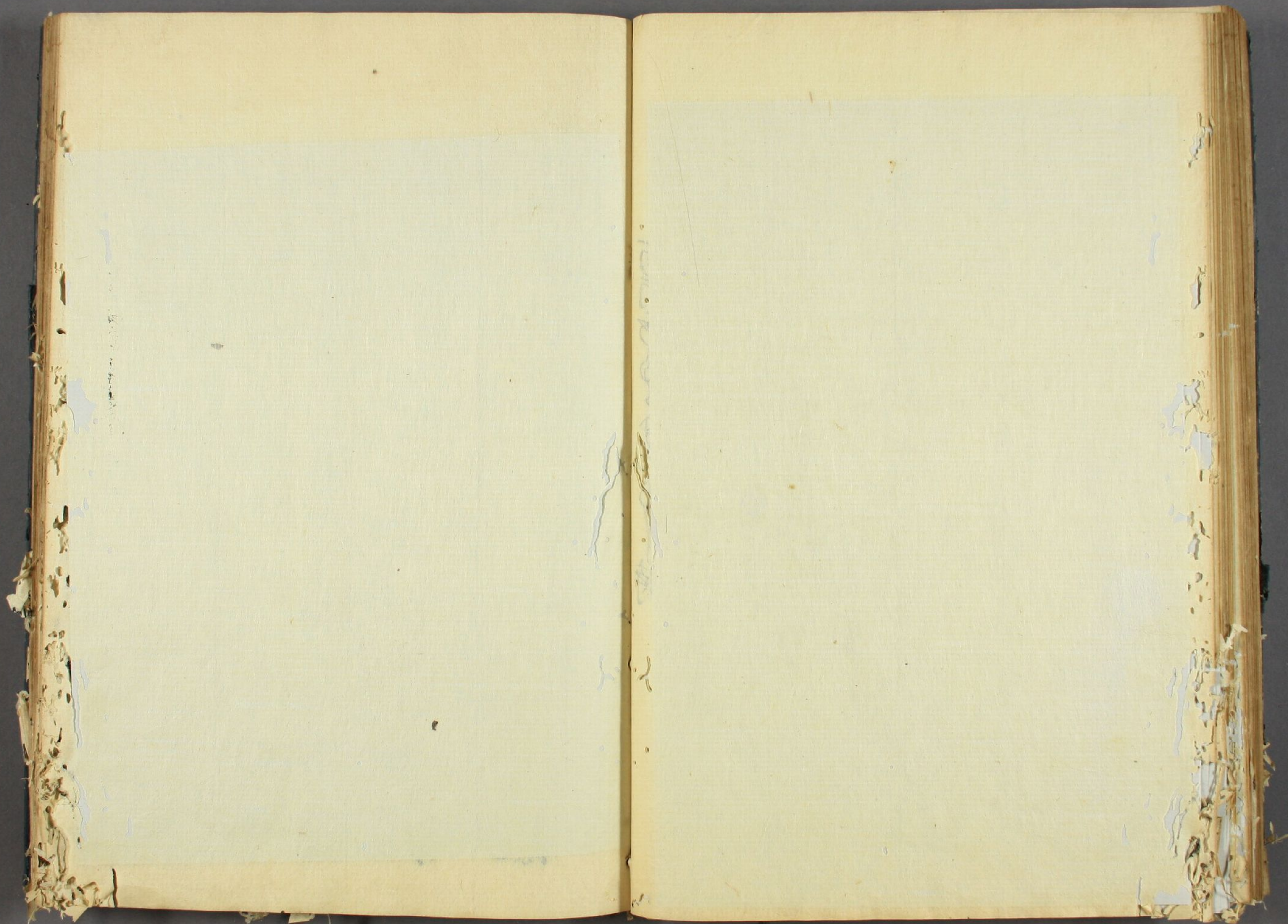
夏衣がぬきくく成ぬまの夜やあひぬりし
延喜寺時月次屏風

壬生右衛門

あつたあつた秋乃白露とてはまきまらるゝ心

共之

みそ記は海に流す重なる夜目と夕暮り波は



新古今和歌集卷第九

秋歌上

題しら原

中納言家持

神代いのみじ流れかきうらうらと吹くを秋集り

百首あまの秋をうらと

崇徳院法皇

うらと秋の葉はあはれうらうらとわたりて秋を風とせり

藤原季通朝臣

あはれなる秋をうらとせりあはれなる秋をうらとせり

文治六年女侍入内侍風

後徳仁寺女侍

うらと秋の葉はあはれうらと秋の葉はあはれ

百首あまの秋をうらと

藤原家澄朝臣

昨日あまの秋をうらとせりあはれなる秋をうらとせり

宿務実天玉院障子またうらとせりあはれなる秋をうらとせり

藤原秀能

秋風のあまの秋をうらとせりあはれなる秋をうらとせり

百首あまの秋をうらと

曾右衛門左衛門定俊

袖の松乃うひのささきせむめく風は秋の
身は法親王五十首身よませけりり時

藤原家隆の長

的なる衣のさしむるもや休たぬ里の秋のささき
子あ百毒を合し 栲波太政大臣

右清門曾通具

わなぬいのよまねび袖の露貯る風は秋のささき

源具親

あまのしるくろくろよまねふわ露とあむる秋のささき

顯昭法師

あつた思乃くろくろよまねふわ露とあむる秋のささき

越前

秋のささきとくろくろよまねふわ露とあむる秋のささき

五十首身よませけりり時秋のささき

藤原雅澄

世首のささきとくろくろよまねふわ露とあむる秋のささき

西行法師

わなぬいのよまねび袖の露貯る風は秋のささき

百首うゝよ 式子内親王

うゝ祿のあゝをれ袖ふらひるあゝのあゝ麻の袂はる風

題 一 次 相換

よゝたのゝあゝの麻のよゝあゝのあゝのあゝ袂をせぬ

大貳三位

袂風を吹じよゝあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

青祿好忠

あゝのあゝを袂のうゝあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

小野小町

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

延喜式月次屏風より

紀書之

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

題 一 次

山崎宗人

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

ゆけが

撰大納言長家

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

花山院時七々の哥はるあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝ

袖ひらて我ふふじや 飛た向ふあはる金糸のつら

七月七日のあふふじや せむしはあふふじや

きり 糸を捕親

雲間より金糸をよきとせしきんをたふれり

七夕哥とあふふじや

大宰大貳の遠

織女おほの羽衣うらめおほの秋風をゆ

小奇

あふふじやあふふじやと吹がふふじや

皇太后の御成

七夕乃こころあふふじやのよふし秋のよふ

百首歌の 式子回親王

あふふじやあふふじやあふふじやあふふじや

家より百首哥とあふふじや

入道前開而太政大臣

あふふじやあふふじやあふふじやあふふじや

七夕乃あふふじや 指中細き公卿

あふふじやあふふじやあふふじやあふふじや

待賢門院諸門

あふふじやあふふじやあふふじやあふふじや

秋雁のしづかに蹄のさかたぬつぎにせぬ

中納言実持

はとれ朝のつら秋にたむとみりよしの白雲

元河内躬恒

秋の野とさけ露よりわはれ我衣より花の香をさけり

小野小町

祖とあまよりられおとせし秋とらえれかえり

藤原元真

女帯花ののちの思ひそくわとわしれあやむ

千五百番秋合 友直中将良平

夕立のまらりたる乃とほの秋をそゆ

蘭とらあり 公歎法師

ゆらと海ぬれし秋も白雲はなまきと白雲の秋風

崇徳院より首あめくまらわきり時

藤原清物朝長

うき世に秋のわさるわ秋の夕とこれらひん

入る新実の太政大臣右大臣よりけり河百首

あうりせゆきり 皇太后宮大夫俊成

いせの袖とる秋 野よとく者も秋のむらり

飛鳥はゆきり時秋野とみゆりゆきり

大納言御供

花人にとりてあはれぬ野下りきては乃かきわはしりか

野下りか

曾孫好忠

とよとてしこ思し花結よなわ露もをわら朝の露花

君之

ふりれかこが母はる物ぬ冬まわめあそわはる

坂上皇則

うらめくあさくらつる花はるまも乃花の物と思ふるが

人麿

いよ^十あはれ野は露とら花はるふいそは花はるし

よふ人あそ

小倉山蘇乃野はれは露はれにみあはれ乃ゆふれ

女清殿子親王

かれつめも風をわらふ花露しあはれつる露あ

百首寄し

式子四親王

花はる露もは露わがいにあはれはるは花はるあ

梅の太政大臣妻百首歌りてせはまら

八條院云

野道あふもつれはる花風とわこよもあはれ花は

和歌の寄合は朝草花といふ事

左邊門待通光

わけぬを野きりしよふ麻乃徳ゆとる新下

題しらす

兼大僧正意圖

身いゆら思いと新乃うとくはれあひ夕暮

宗徳院時百首寄りしきりよむと

大花瑞鈴宗

身乃りしと思いつく夕暮れ新のうと風とわ

秋夕のしほきり

源重之女

秋夕の物とも思ひ露のしほ新乃うとく風は清

諸門院よ百首寄りしきりよむ時

藤原基俊

秋風はるく思ひしつと吹きて新乃うと風は清

百首寄りしきりよむ時

梅政公政大長

新下はあひし風乃新乃うとく夜はるく思ひ

とあつと思ひしきりよむ時

題しらす

善のしほしあよむ新とあひ思ひしきりよむ袖は清

家よ百首寄りしきりよむ時

物いもあつと思ひしきりよむ時

と乃こころしむとけくわあういよあせけ
よ山翁秋のこころ事と

前大徳山慈園

方々路や流るれれとあはれに西の山々の

題一とん 宗蓮法師

山に雲をれあうもあうわあはれあつた乃秋の

西行法師

心よあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

西行法師とてつと百首あはれせつと

藤原定家約於

又つとせし花もあはれあはれあはれあはれあはれ

五十首あはれあはれあはれあはれあはれ

藤原雅純

あえてあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

秋乃こころとてつとあはれあはれあはれ

文内卿

其事はつとあはれあはれあはれあはれあはれ

鴨長明

秋風乃こころとてつとあはれあはれあはれあはれ

西行法師

清はれ秋の風をのちわたりては秋の風

式子内親王

それの音もあはれ秋風はあはれとて

題一ら若

藤原長能

日くはあはれとてあはれとてあはれ

和泉式部

秋はれとてあはれとてあはれとて

常祿好忠

秋風はあはれとてあはれとてあはれ

相模

晴乃露も涙とてあはれとてあはれ

法性寺入道兼用白太政大臣家持

野風

藤原基俊

左邊とてあはれとてあはれとてあはれ

千八百毒方合

右邊門内通具

柳の葉はあはれとてあはれとてあはれ

又十首あはれとてあはれとてあはれ

いふ

曾大后之大夫後成女

秋風はあはれとてあはれとてあはれ

身は法親王十首あはれとてあはれ

藤原家持御書

まゆり月より痛れ細くうすくみぬれおならうぬ
橋政を政大臣百首秋合り

藤原有安御書

風よふ深き未れ露よあやむきそぬらふ
あきぬめく十首寄しうすくわの時

方廣門待通光

越武野のゆもとと物ねてそあやむら風よ未れ
百首寄めてうすくわの時

藤原信正御書

あきぬめく十首寄しうすくわの時

式子内親王

あきぬめく十首寄しうすくわの時

圓融院法皇

月影の初秋の移りゆくもあきぬめく十首寄し

三條院法皇

三條院の初秋の移りゆくもあきぬめく十首寄し

堀河院法皇

堀河院の初秋の移りゆくもあきぬめく十首寄し

有京東海松尾

おんはしる思とさひなき月乃文のわびの
五十首方とてまわし時月前草花

持政左衛門尉

故乃のわかれ森山よりわかれ松尾の

建仁元年三月哥合よ山家秋月とて

よるは

時とわれあつし人なきもまてふ乃月松風

八月十夜和哥西哥合よ深山月とて

深うぬお山の夜は寝たためこぬ本丸の月さひ

月前松風

宗運法師

月長かりぬ本丸月夜松とて秋をせゆ

鴨長明

なごまふか物也育よ又我方の山の松乃松風

山こりまふとて人たつら

藤原秀能

華則の山乃松乃松乃の上はゆさあ夜梅の月とて

八月十二夜和歌の哥合よ海鳥とて秋月とて

事と

文内卿

おわびとてわかれの月とてぬれぬ

宜秋の院母殿

馬が那波の秋の夜に乃をよし浦まじり月をいそ

鴨長明

松嶋やうらむおの秋の神月を思ふあふいのこを

題一ら次 七條院大納言

こころに野鶴もよみわぬ秋の月をいそを

和歌百首合し海老月と

藤原家清朝長

秋の夜に月やと海のおよりあゆまらう秋の月

題一ら次 第大僧正慈圓

うたをいそむいそむいそむあふおの秋の月

大江千里

あふあふあふの月をいそむとくれを名とらふ

源光濟

あふあふあふの秋の夜にうらむ月と秋の月

上東門院小少將

あふあふあふの秋の夜にうらむ月をいそむとく

和泉武敏

あふあふあふの秋の夜にうらむ月をいそむとく

月とあふあふの秋の夜

藤原花承約

乃々之袖とそまひら秋丸くし月よの方ら糸を穿ん

也

相換

身中家糸とよりなき秋の月袖よりぬけし糸

永承四年一月裏書合

大納言源信

月影のすこしかふわし秋雲を吹く夜夜あわし

糸

右清の將通光

高田夜をわしれ松あけしやあけしと記すの秋

景徳院より首書すてまらぬもの

右京大夫顯輔

雄風よあれひそれ結まらんとれ秋の月影のさき

野

道因法師

山影のさきよりさきとせし秋の月影のさき

殷富門院大輔

あまのつとまぬあなとあつせえとせし秋の月

式子四親王

よ折れふさそも秋の月影のさきとせし秋の月

ぬきかすあしきふらりしはれ思ひもせし秋の月

又十首書もさきより

梅政太政大臣

雪入かきくひきてそら秋風と松ありく月とみか

家よ月よ十首ありくせ侍きり時

月よ心もあふあかした秋乃也れいと志ぬ松の風よ

敦康定家朝臣

さしちるる梅也れ秋の風よの月と明くく雪乃梅

家一ら次 吉大お忠經

秋夜乃かきかひいとうあかめれ梅よあけわらふの月

五十首ありくくまららるる野徑月

梅政太政大臣

初来きるるもひと山の武彦野の草風系わははら河

雨後月 文内卿

月よか秋乃夜とれふじら梅の晴のそとれはる風よ

家一ら次 右侍門侍通具

秋乃夜とるる月よ心露あり袖よ梅よこそ秋止

源家長

秋乃夜もやこあら秋めけくこくくあふ露あり

元久元年八月十五夜和秋雨ありく田家見

月よありくく 菊太政大臣

風よか山田丸庭とるる月よあめくくしとる秋

和歌のよき合の四季月と

兼太信正慈園

鷹乃ら伏えれと田よまきまて種ぬ熟れ夜月と

皇太后文太史修成女

あふ吹く海よ海とせとくし夜月を海とよとあめり

題一らす

わかれの種ぬ熟れ鷹のつらと月よとくし夜月と

大中法定雅

舞のうわ種ぬ熟れ月のつらと月よとくし夜月と

宗徳院法時百首あつらふ

左京大史頭捕

秋乃田よ平らとと乃と海とつらと月よとくし夜月と

百首あつらふ一和歌

式子内親王

秋れとと種ぬ熟れとくす方わのいと種ぬ熟れ夜月と

秋風の中は 太上天皇

秋れ露や枝よとく種ぬ熟れとくす方わのいと種ぬ熟れ夜月と

千五百首あつらふ 左京門外通光

さふと又ととあめりつらと月よとくし夜月と

源房瑞雲あつらふ晴月の光と

二條院藏本

紫のれ秋乃霞えれ露きく又流う袖よわちけの
又十首哥もてまらけし時

藤原雅純

拂ふのほらう露れまけくやらの月の袖をて

ふ

新古今和歌集卷第五

秋歌下

秋歌あめあめたのこももくくもんゆりま

麻のつとを

藤原家隆朝臣

小松葉うらら山乃夕何ぬれたやひとも麻のあくせん
百首哥もてまらけし時

入道方太君

山嵐め麻れあたらしくもなわあめ月よき夜やわ

宗蓮法師

野多せしとけく草ゆわかれそは平山深きま

題一ら次

後惠法師

嵐の由を系よなく麻之恨のつらと云
ら舞

前中納言匡房

あう麻のあらととぬれさ山とそそ秋の吹

百首可もてらわし時秋の奇

推的親王

みゆ道は松の木と湯と流るるの嵐もととほとられど

暁岡麻といふ事とらえり

土清門田太長

日後あぬは空あつてもまふん麻なりし秋の記

百首秋のよゆらり

持政を政大臣

あふまは松乃嵐わたるじんなのしゆかきし

牛又百首可合

前大僧正慈圓

かく麻れたすはたそのあをたふあまそそぬ秋の記

安母可合一ゆらり麻とらり

指中納言俊忠

決夜あう麻れあふ今よ小萩をたれはるそとゆ

題一ら次

源道深

寝るしとてかあぬ松の葉あつてもぬ麻の記

西法法師

と心願後らく時麻乃禱たたらうはたかおとふた
白河院よりなりしきしはよとて家秋興と
ふかしくとくくも人のたれ。

中宮大史師也

と心願後らく時麻乃禱たたらうはたかおとふた
白河院よりなりしきしはよとて家秋興と

藤原朝總執事

独神やうとくくも人のたれ。
題 一 次 後惠法師

秋田末とあふつと成りて物とて麻乃禱たたらうはたかおとふた

祐子内親王家言合の後志の奇なりとてあ

きらふ 権大納言長家

とて心願後らく時麻乃禱たたらうはたかおとふた
秋田末とあふつと成りて物とて麻乃禱たたらうはたかおとふた

権大納言長家

とて心願後らく時麻乃禱たたらうはたかおとふた

権大納言長家

とて心願後らく時麻乃禱たたらうはたかおとふた

権大納言長家

とて心願後らく時麻乃禱たたらうはたかおとふた

権大納言長家

秋の風あつた風のこころに
こころのこころを
こころのこころを

吾流の政教に

時鳥のついでに
ついでに
ついでに

中納言持

今も秋風こころに
こころに
こころに

人麿

秋の風あつた風のこころに
こころに
こころに

さよふれあつた風のこころに
こころに
こころに

母のこ

さよふれあつた風のこころに
こころに
こころに

菅野大政大臣

草葉のこころに
こころに
こころに

中納言持

秋の風あつた風のこころに
こころに
こころに

惠度法師

秋の風あつた風のこころに
こころに
こころに

人麿

秋の風あつた風のこころに
こころに
こころに

天曆詩奇

秋の風あつた風のこころに
こころに
こころに

後冷泉院みこころ申きり時野花之
あまらんと
諸川古大持

露のひら野のさけの衣ぬれをうかぬまの
果色露流とつふとと

後東基後

庭の面よきの遠よまのせくこのまふとら
白河院よて野草露舞とつふとと
はくまらあつよ 贈方大臣長家

秋の野の草染とて黄とて露ぬまてまののの
百首寄しめてふつと時

宗蓮法師

物思小袖わら露わあいにし秋風あふぬとれ

秋乃あつと 太上天皇

露を袖に物やを花をほそれとて秋のあふぬとれ
野系らほ白れ梅とあつとて山の家よ秋風

題しつと 西行法師

まわく秋夜をよ秋の露をいよらるる秋の露を
身ま法親王家ふ十首あつと

藤原家澄約法

空の縁をがう秋のあふぬとれ秋のあふぬとれ

百首の神子内親王

松をよみよむれわさうらふしをの松原の松原の松原

藤原補尹朝長

秋風はあけしつらわ吹かぬやういんつとささ

前大僧正慈圓

冬つるを枕よさるるも押さぬあそびて夜のは

子又百首言合十秋哥

指中細言公卿

冬つるを枕よさるるも押さぬあそびて夜のは

和歌よ言合十月娘

あそび

指中細言公卿

軍をわねあそびあね恨てもめれわさうらふあそび

文内卿

海をわねあそびあね恨てもめれわさうらふあそび

子又百首言合

藤原定家朝長

秋をよめあそびあね恨てもめれわさうらふあそび

指中細言公卿

秋をよめあそびあね恨てもめれわさうらふあそび

指中細言公卿

秋之

鷹さよくわの風さしなが 雲表待るよきぬ夜よ
栲衣のさほと 有系雅後

みく野れ山乃秋の身さ 雲さけくあささしきあしわ
式子内親王

子さの心乃とこいあさそて抱ふ袖の落ぞく
百首あそとまわし時

ゆげあわ山のしらさ月乃そとよ 丸雲よあふ
九月十三夜月之海がくゆらと泳わしあ

あふ計か 道信朝臣
秋のささ夜あけあさの月乃まて袖まのころあさ

百首あそとまわし時

藤原之家朝臣

独わら山鳥れあのもさあわ霜とよ海よ床乃月け

栲衣を政太治大ねよゆら時月之五十首よ

よせ待らよ 宗蓮法師

むとあふく 野色れあささしき指く露れと

月哥とあふらゆら

大細玄波信

秋乃あふ夜さしりあささ 月乃あささしきあ

九月のふらあふら 花山院法師

秋乃雨多早月成ふやあはれなるか
秋乃雨多早月成ふやあはれなるか

又十首奇くして月つりし時

常蓮法師

しら雨は海もまじし秋乃葉も芳立のふか秋風はれ

秋くこふ
太上天會

少印さたし山は秋の物ともわ芳立まぬく海は秋風

河芳くふと
た清の春通え

わはれわ川の浪れたるあまのこもつる秋風はれ

塔川院の河百首うこもあつる芳くふと

権大納言公實

兼とらるる川芳くらあて雲井に花を秋に山はれ

題しら秋
曾孫好忠

山室かきわは羅乃をくもる遠かしの秋の袖とみく

清原深喜父

かく鷹は秋とのこそ小倉山芳立るる時ふまはれ

人鷹

かみは秋の葉は秋の吹なるともなるとも

秋風よ山花もあま鷹の乃つるをさかあやあはれ

凡河内躬恒

初鷹は秋風くくもるあまのこもる秋の葉はれ

鳥美の風よさらばついでに我らの心を癒す

鳥美の風よさらばついでに我らの心を癒す

西行法師

よもぎの風よわらわきのあふ山花のゆり初めぬを
白きついでにけあけぬれに思ふおとの友よ

みす首めくすつありし時月前同鷹のついで

と云 藤原家隆朝臣

鳥美の風よさらばついでに我らの心を癒す

と云 西行法師

よもぎの風よわらわきのあふ山花のゆり初めぬを

皇太后文太夫

吹ぬる風よさらばついでに我らの心を癒す

ついでに我らの心を癒す

藤原家隆朝臣

秋風の袖よ吹さらけぬれに我らの心を癒す

みす首めくすつありし時月前同鷹のついで

と云 西行法師

よもぎの風よわらわきのあふ山花のゆり初めぬを

みす首めくすつありし時月前同鷹のついで

と云 西行法師

新編たてに記

九重にわたりぬとも菊はむりの露とけりいふも

指中綱言之類

今よりわたりぬとも菊はむりの露とけりいふも

の露の落り野をこれさわくせと

中務卿具平親王

秋風はむらの野をわたりぬとも菊はむりの露とけりいふも

題一ら寸 大江赤之

孫まよはし神をこころし秋風の風吹くわたりぬとも

千五百番歌合 前大僧正慈圓

秋と菊をわたりぬとも菊はむりの露とけりいふも

左近将軍通光

わたりぬとも菊はむりの露とけりいふも

題一ら寸

わたりぬとも菊はむりの露とけりいふも

皇太后文大夫俊成女

わたりぬとも菊はむりの露とけりいふも

子五百番歌合

わたりぬとも菊はむりの露とけりいふも

秋こそと 太上天皇

わたりぬとも菊はむりの露とけりいふも

の露の落り野をこれさわくせと

百首寄しとまわし時

栲政ちぬふに

三あはれなりや霧あはれを遣は衣ごとく記しむわが心

千の百首秋分 春宮指大史公継

寝そとる長月の夜の静さしこもる吹風し霧もよど

和歌本ももろの首寄はつらつらつわし時秋分

前大僧正慈園

秋風の淡路乃流れをゆきゆきと月と送るる風

言秋のこころはと

長月こころはあはれなむとてわらわら月をいひて

栲政大政大臣大將はゆきゆき時百首寄しとまわし

ゆきゆき

宗蓮法師

かききれ雲乃ゆきし秋言て夜もよも霧もよも

さうらのこころなりりのありとみゆ

中務卿具平親王

花乃まふお雲しぬらん山栲所り花の地つと痛

紅葉道寄しとまわし

子倉院法師

うもせれは雨ふ山乃お雲しとまわしとみゆ

秋高とてみゆ

八事院法師

續のいのしおれ格つる多し能てた山をいそむる此
敵勝田天王院の障子にまうり川とある所

天上天會

とく河ゆのれ本れに白敷つて山田原の町ぬとそ
入道前実白太政大臣家より首首うる人侍を
よとみらと
皇太后文太史後成
公道やとみらとみらんぬつて山松の町ぬよぬとぬ
大井川にぬりめてぬぬかん侍らありよ

藤原捕平朝長

りあすあてろうをうぬぬと風た方ありとぬ

題一ら次

曾祿好忠

白はさこの山ぬくそ原をぬぬと本れ葉をぬ
百首奇くしてつちりし時

文内端

高河あつてぬよあそら流してらぬあてあつてぬ
方大およ侍を侍賣より首首奇合し侍をぬ
とそとつて侍を
橋政太政大臣
柞原志いんといつぬやうとゆらんをわぬ草紙文をぬ

藤原元家朝長

寺よりぬ流るるをよつてぬぬとぬぬ

清之乃繪よあれぬ宿よとふ心
源俊賴親長

あきらむ約集いふらとれく
百首哥たあまらわく秋

式子の親王

桐乃葉も梅もふかしく成る
曾孫好忠

歌一十

金武風よ未れく散てふか
守光法親王五十首哥のこゆらり

春之行はまはる

紫のふき海にせくとれ木
千の百首言合

藤原家澄朝臣

あつめと心は陰乃下れ
歌一十

西行法師

松中ふまき記のうら散
法性寺入道藤原白太政大臣家言合

前春藏親澄

鶉のくちかむめてち梅
百首哥もくちかむ時

三條院

まゝのふりかへぬてのゆゑに

題一うらと 柿本今磨

花のほのぼののさくらうらとまの秋風をたのむ

拾中絶言長方

わが心ゆくはあつらひの秋風

長月がらみおせよ自らの心ゆくまゝに

おもむかひなむらさきと申はうらと

今とあつとよ 拾中絶言長方

紅葉とらうらと秋のころは

交り首の秋合一はきり

拾政太政大臣

あつた今とらうらの秋風

ふみ百の秋合一 拾中絶言長宗

ゆかりの形かたふの秋風

紅葉とらうらと秋のころは

柿本今磨

うらとまの秋風をたのむ

この圃はゆきうらと秋のころは

能因法師

うらとまの秋風をたのむ

くみねの秋思の事なほいづれか
かへりて言ぬらねと老ぬれさるる
五十首寄よる女侍りあり

守覚法師

所よりてついでに秋と行ひたるを
同九月書はんと 前古政古

なご世にわたりてはしるはれり

ついでと



